なぜこのような掌編をまとめることにしたのか。その意図を簡単に述べておきたい。

根のある思想

私は、高校教員になり、まず障害のある生徒の地元高校への進路保障の教育運動、つづいて組合運動を担い、教員を辞してからは党派組織の専従もした。そしてそれに破れた。このような闘いは、いずれにせよ敗北の連続で、破れたこと自体は一般的なことである。

労働運動であれ、世の変革の運動であれ、人はそのとき手元にある言葉で闘わなければならない。そして、闘い終われば総括し、経験を言葉に蓄え次代に引き継がねばならない。そう考えるなら、機関紙などに書いてきた自分の言葉が、人々の心の襞にまでは届いていなかったのではないかということを、考えざるを得なかった。

闘いはさまざまに場を移し持続しなければならない。革命は永続である。しかし単にくりかえせばよいということではない。人の営みとして蓄積されるためには、言葉が豊かになることを伴わなければならない。それはいかにして可能か。この問題に関して鶴見俊輔さんは次のように言っている。

日本の知識人は欧米の学術をそのまま直訳していて、日本語のように見えますが、実はヨーロッパ語です。それをよくわかっていないのです。そういうものとして操作しているので、根がないのです。しかし、日本語そのものは二千年の長さをもっています。万葉集から風土記から来ている大変なものなのです。万葉集を読んで聞いてわかるのですから。イギリス語、フランス語より深い歴史をもっています。今もそれは生きているのです。この古い言語の意味に、さらにくっついている魑魅魍魎も全部引き受けて、何とか交換する場をつくりたい、それが竹内好の言語の理想です。なぜ、それを生かさないのでしょうか。そこに日本の知識人が行っている平和運動とか、反戦運動がすぐにあがってしまう理由がある、という感じがします。（『無根のナショナリズムを超えて 竹内好を再考する』鶴見俊輔、加々美光行／日本評論社 2007/07）

「反戦運動がすぐにあがってしまう」は私にとって痛切な言葉である。ここで鶴見さんが言っていることは、私の問題意識と同じである。私はその後、人として言葉を意識し、言葉を磨きながら考えるしかないという問題意識から、近代日本語をとらえ直す作業に着手した。近代日本の学術の言葉、理（ことわり）の言葉は、根のある言葉を掘りさげ意味を広げ、また深めるという方向にはなされなかった。これを教訓にこれからのことを考えよ。これが私が自分に課した課題であった。

近代の学術の言葉は日本語で定義されていない。その言葉を使うものは、いざとなれば西洋語に戻る。現代日本語の主な言葉をもういちど定義し直さなければならない。しかし、どの言葉でそれをするのか。現代語をそのまま使えば、それは定義にはならない。

私は、この問題意識のもと、鶴見さんがいわれるより古く、三千年前に縄文語がタミル語に出会いそして混成し熟成してゆく過程を現代において追経験し、日本語の構造における位置を確認し、それをもとに基本的な日本語を再定義していった。それは、「古い言語の意味に、さらにくっついている魑魅魍魎も全部引き受け」

るための準備作業でもあった。

そして、この基礎作業のうえにいくつかの論述を試み、それをとおして現代語を再定義し、それを青空学園日本語科（検索）においてきた。その蓄積のうえに、ようやく本書に収めたような論考を表す段階になった。

島崎藤村の『夜明け前』の解読から日本の近代を問うこと、その根底にある神道を今日において取り出すこと、そして、生きることの意味を問うこととして言葉を定義すること、これらである。

偽りの普遍性

その一方で、このような言葉を基とする固有性からの論考は、歴史の現段階が求めることでもある。

歴史の現段階、それは資本主義が終焉にむかいつつあるということである。拡大を旨とする資本主義が、もはや拡大の余地がなくなることによってゆきづまり、それが白日の下にさらされている。『資本主義の終焉と歴史の危機』（水野和夫著、集英社、2014）にあるように、資本主義とは中心部が周辺部を収奪しながら拡大するシステムそのものであり、拡大・成長は資本主義の存在条件である。ところが地球は有限である。もはや現実に拡大する余地はない。したがって、資本主義は終焉する。日本はその先端を行っている。

実体経済活動への投資では利益が出ないので、資本主義延命策として周辺部を国内に作り、そこから収奪するしかなくなっている。この方法は、結果としていわゆる格差を拡げ購買力を衰退させ、行きづまる。あるいは、アメリカのように金融空間を作り出し、金融空間で周辺部から金を集める。しかしこれは必ずバブルの崩壊を招く。さらにまた、欧州 EU のように欧州帝国を作り出すことで生き延びようとしても、帝国の中の周辺部からの収奪を強めれば結局は収奪されたところにおいて危機が起こる。いずれも擬似的に拡大する場を作ろうとしてきたが、それらの方法はもはや限界に近づいている。そして、軍事分野以外に利潤を生み出すところがないのが現在である。

これまでの八百年、資本主義は偽りの普遍性をおもてに出して拡大してきた。かつてそれはキリスト教であった。宣教師の布教につづいて資本が進出していったことは歴史の事実である。そして、ロシア革命の前後からは、共産主義にはそれがないとしてうえでの自由と民主主義であった。これは今日まで続いている。近年は、人権侵害や民主主義弾圧を口実に、資本を投下する場を得ようと政権の転覆も視野に入れた「人権外交」策である。イラクの政権を倒し、その後にアメリカ資本がイラクのあらゆる分野に進出したことは知られている。

しかし今、その資本主義そのものが終焉に向かっている。それによって、そのような偽りの普遍性を掲げた資本主義の拡大そのものがゆきづまっている。西洋近代、とりわけその土台である産業革命は、根本的にギリシア後期のプラトン以来の考え方を最後まで進めることで達成された。それが近代であった。しかし今やそれは地球という有限な世界のなかで限界に至っている。

世界を「単一の世界」へと突き動かしてきた資本主義の力は、言葉に対してその固有の構造を失わせ表面的な水準での共通化へと突き進ませようとする。この資本主義のもつ力を自覚しこれに対抗するために、八〇〇年におよぶ経済を第一とする西洋の文明を相対化しなければならない。そのとき、まずなされねばならない基礎作業が、資本主義が塗りつぶし覆い隠した、それぞれの地域や文明の固有のものの見方考え方を、取り出すことである。

これが前提である。しかし、では次の時代の世はどのようなあり方であるのか、そしてそれをいかに生み出してゆくのか。これは未だに見えない。そのとき、それぞれの地についた根のある固有なものの見方、考え方を明らかにしてゆくことは、崩壊する資本主義のもたらす混乱と混迷からの活路を見出してゆくうえで、まずなされねばならない必要条件である。

これが歴史が求めていることであり、ここにまとめた三編は、そのための基礎作業の、私にできるところからの試みである。

歴史を造る者

資本主義が終焉期にさしかかっているとき、次の時代をきり拓く主体の形成のためには、それぞれの固有性に根ざした言葉を準備することが必要条件である。そのための基礎作業、それが自己の仕事の位置づけである。

人は何において人であるのか。その根拠をどこに求めるのか。人は言葉をなかだちに協同して働くいのちである。それを協働という。言葉による協働、これが人の人であるゆえんである。ここに人の根拠をおく。これがわれわれの立場である。そしてそこで生みだされるものの交換過程が経済である。

資本主義は、人を資源と見なす。そしてその資源からいかにものを奪い取るのかということをその基本的な動機としてきた。交換過程は複雑化し、そこに貨幣が生まれ、貨幣を増やすことが自己目的化する。これは結局のところ、いかに効率よく集め奪うのかということである。そのことが経済活動とされた。資本主義は、経済活動が人生の目的のように主張する。その意味で経済を目的とし、人そのものを手段、つまりは資源とする。

しかし人にとって経済は目的ではない。働くいのちの輝き、ここに人の意義がある。人は尊厳ある生活の実現のために協働してきたのである。経済はあくまで手段である。この人の原点に立ちかえらなければならない。

人を資源として収奪し格差を拡げ、その一方で戦争をあおりそこから利益を得ようとする金融と軍事産業の複合体に対するさまざまの闘いが、二十一世紀に入って世界の各地で広がってきた。新しい運動は決していわゆる物質的な豊かさを求めるものではない。人の輝きを奪い尊厳を踏みにじる、そのことへの怒り、これが人々を突き動かす。

また、さまざまのところで、これまで資本主義が広めてきた価値観と異なる別の生きる道を模索する人々の運動が、裾野を拡げている。ものの循環する世の模索である。それは、根のある固有なものの見方、考え方に基礎を置かねばならず、日本語世界では、日本神道の示す道である。

その一方で、日本での排外主義や極右政治潮流は、いわゆる日本会議や神社本庁などの宗教がらみの組織が支え動かしている。彼らが依るところは、国家神道である。

なぜこのような勢力が拡大したのか。先の鶴見さんの意見に通じることであるが、そこには近代主義的な左派の責任が大きい。一言でいえば、近代主義的左派は国家神道に惹かれるものの内部に入り込んでこれを批判するということができなかった。

私は、日本語から日本神道を取り出し、国家神道がこれを真逆のものであることを示した。日本語から論述するなら国家神道を奉ずるものの内部に届く。彼らが、また日本神道を否定することはできない。

このように、三つの論考は、資本主義の終焉の時代に、次の段

階の生き方を、日本語に伝えられてきた古人の智慧に学ぼうとするものでもある。

真の普遍の場

「神道試論」において次のように書いてる。

> 日本語には日本語に結実した智慧としての神道があるように、朝鮮語にも朝鮮語に結実した智慧としての神道があり、琉球諸語にも琉球諸語の神道がある。世界のそれぞれの言葉に、それぞれの神道がある。それぞれの神道はたがいに認めあって共生しなければならない。そのための智慧と実践が今日の課題である。

実際、協働するものが、それを成り立たせている言葉に基礎を持つ固有性に立脚して、そこを離れることなく、協働することを互いに認めあうとき、固有性を越えて分かりあう可能性が開かれる。固有性を深く耕して徹底し、固有性を突き抜けた新しい段階の普遍性をめざす。言葉のなかに蓄えられてきた智慧は、それが直接の生産を土台にする生きた人の智慧であるかぎり、十分に掘り起こされたならば必ず通じあえる。人はわかりあえる。

これは可能性であるが、また現在の歴史が求めていることであり、それゆえにこの可能性を現実性に転化することができる。しかし、その途は容易なことではない。世界の各地に広がる新しい運動が、たあがいを理解しあうこと、これが突破の途である。こうして、固有性をたがいに尊重しあう場としての普遍を生み出すこと、これが今日の課題である。

マルクスによって獲得された、世界に対する目的意識性と能動性の考察を、西洋自体にも向ける。歴史は、西欧文明が押しつけた疑似の普遍性ではなく、固有性が解放された人の生き生きとした普遍性を求めている。固有性が互いを認めあって共存し、ともに問いかける普遍の場を求めている。

レーニンが『哲学ノート』で言っているように、普遍性は固有性をもって実在し、弁証法的な普遍性は実在するな固有性と不可分である。固有性をもつ実在が共存する場、それが真の普遍の場である。

実在するものは固有性のもとに実在する。近代主義的左派は、このことの重大性を理解できなかった。それが冒頭の鶴見さんの言葉の意味である。

しかし、可能性を現実性に転化するための実践的方途は、開かれたままである。この途を見いだしていくには、膨大な努力の蓄積と、現実のちからが不可欠である。

本稿は、あわせてその課題を提示するものであるが、実践的方法を具体化することは、ひらかれたままであることも、指摘しておきたい。